

【一部は筆者(菅原)の独断的判断にて、関連部分に記載している。】

自分【玉虫】は従臣として仕事をしていた間、時に望み事に触れて非常に心に感じたものがあった。しかしそれらの中でも本文にて記載するには、嫌い憚られるものがある。ここにそれを記す。今再び孝校してこれを見ても、公然とこれを言うのは元々出来ないことであるが、しかし、全く削除するのも惜しい感じがする。そのため、別に抄出してこれを一卷として最後に付記した。敢えて他人に示そうとしたものではない。

【01】 正月廿七日の事

正月廿七日の風波は最も烈しく、船長始め自ら船上に出て水夫と共に作業を行う。終夜寝ずに作業してその難を免れた。翌日になって船長が千ドルを出して昨夜の功を賞賛した。その恩賞の速さには実に感心することである。もし長官独りが傍観して徒に属官を呵責して労苦させたならば、たとえ功労あったとしても、自分の意に合わない者は賞せず、仮に賞したとしても数回の吟味をして、日月が掛かってしまえば、必ず部下の死力を得ることは出来ない。この様な緩急に合った者はその思慮がなければならず、米国人は元より礼讓に薄いけれども、艱難辛苦・吉凶禍福の際は、庶民と同じく更に上下の別がなく、いわんや褒賞の速さはこの様である。緩急の節は各人身を挺して全力を尽くす。米国が隆盛なのはこのような理由があるのだろう。長官たる者は事に当たり、全身全霊を傾けるべきである。

【02】 二月十八日の事

サンドウィッチ島で市街散策をしたとき、普濟堂(ふさいどう)と記した扁額を店の前に掲げている所がある。自分はこれを尋ねたが、中国人が薬を商っており、この中国人は、慷慨(意気が盛んなこと)の気が多く、共に話合いをするのに十分な人である。別の部屋に入り、互いに筆談して時間が過ぎた。互いに別れの挨拶をして会釈してその場を去った。その後、新見御奉行の用役某が自分はその店に行った理由を尋ねてきたので、詳細に教えてやり、筆談の一部を見せた。彼は非常に喜んで帰国のお土産とすると行って新見御奉行に差し出したところ、御奉行は非常に危惧したと行って、彼は顔色を変えて自分を攻め立てた。先の筆談の一部に「英吉利・米利堅を夷と称す」と言う部分があ

り、今米国の船に【一行の命運を】託して来ているので、英米を卑下する語が万
一米国に聞こえたら大害を受けるだろう、今後筆談を止める事との御奉行の
注意があったと言っていた。自分【玉虫】は元々夷語を知らない。外国の情勢
を探查するのに何を以てするべきか。幸いに中国人が居て筆談で接し、少し
ばかり夷情を探ろうとした。「夷」と称するは中国に対する語で、どうしてこ
れを咎むるのであろうか。且つ、米国人の心は寛大で、これらの小事に関す
るものではない。ところが、米国人を【訳も分らずに】尊崇し、恐れをなしてそ
の意に逆らわないようにしようとすれば、米国人は益々凶に乗って、終には
制御が出来ないようになってしまうだろう。筆談の内容を以下に示す。

「現今、文学之盛、唯貴国与我国耳。而近来洋学流入、大害聖道。貴国亦無
係此患否。玉誼」

現今、文学の盛んなるは、唯だ貴国と我国とのみ。而るに近来洋学流入
し、大いに聖道を害す。貴国亦た此の患に係り無きや否や。玉誼

『現下文学、惟我国与貴国同。而西洋之学大悖倫常、殊不足取。所慮、近世
人心厭常喜新、聞有附和。是亦世道人心之變、秉聖教者堪為感慨。麗邦』

現下、文学は、惟だ我国と貴国と同じ。而るに西洋の学大いに倫常(りん
じょう)に悖(もと)り、殊に取るに足らず。慮(おもんぱか)る所、近世人心
常を厭(うと)い新を喜び、附和するもの有りと聞く。是れ亦た世道人心の
変にして、聖教を秉(と)る者の感慨を為すに堪えたり。麗邦

「大然。玉誼」

大いに然り。玉誼

「先生住此地、凡幾年。玉誼」

先生此の地に住して、凡そ幾年なるや。玉誼

『僕自咸豊三年別故土、出遊花旗旧金山名架罇寛賦者。居兩年余、遂于咸豊五年
五月、買舟来此。今計、出門已七八年矣。毫無善状、可奈何。麗邦』

僕は咸豊三年より故土に別れ、花旗《アメリカ》の旧金山《サンフランシ
スコ》、架罇寛賦《カリフォルニア》と名づくる者に出遊す。居ること兩年
余にして、遂に咸豊五年五月に舟を買って此に来たる。今計るに、出門し
て既に七八年なり。毫も善状無きを、奈何すべきや。麗邦

「人生皆如此。何足憂乎。玉誼」

人生皆此くの如し。何ぞ憂うるに足らん乎。玉誼
「近聞、貴国与英夷有争鬪之事。先生審知之否。玉誼」

近ごろ聞く、貴国と英夷と争鬪の事有りと。先生審(つまびら)かにこれを知るや否や。玉誼

『逆夷起衅始末僕已詳聞。真所謂目撃而心傷者。蓋戎狄之人性等虎狼、立心残忍、其与聖道毎々相左。近聞、于本春在天津北河地面変仗。未悉真否、俟有家報、始知真実 麗邦』

逆夷の衅(きん：争い)を起せる始末は僕既に詳しく聞けり。真にいわゆる目撃して心痛む者なり。蓋し、戎狄【いてき】の人性は虎狼に等しく、立心残忍にして、それ聖道と毎々(つねづね)相左(もと)る。近ごろ聞く、本春、天津北河地面に在りて、変仗《交仗の誤り：交戦》ありと。未だ真否を悉(つく)さず、家報有るを俟(ま)ち、始めて真実を知る。麗邦

「貴国尚如此。我国自去歳夏六月、開互市於武州横浜港。黠夷之跋扈不可勝言、後来之害不可計、是予所以深歎也。玉誼」

貴国尚此くの如し。我国は去歳の夏六月より、互市を武州横浜港に開く。黠夷【かつい：悪賢い外国人】の跋扈するは言うに勝(た)うべからずして、後来の害計るべからず、是れ予の深く嘆く所以なり。玉誼

『今聞、貴国与花旗和好。実属可喜。但不識此次奉行出使合計文武官員有幾、且往花旗、是常居彼土否、抑前往觀其風土人情、即使回貴国。麗邦』

今聞く、貴国と花旗《米国》と和好すと。実に喜ぶべきに属す。但し此の次(たび)の奉行の出使合計文武官員幾ばく有るやを識らず、且花旗に往く、是れ常に彼の土に居るや否や、抑(そもそも)前往《赴く》して其の風土人情を觀、即ち貴国に回(かえ)らしむるや。麗邦

「今出使花旗者、大抵有文武之輩也。但近来所差異于古、多是西洋学之人耳、而専学聖道者、纔七八人而已。是亦堪為感慨。玉誼

今花旗に出使する者は、大抵文武有るの輩なり。但し、近来古に差異する所は、多く是れ西洋学の人のみにして、専ら聖道を学ぶ者は、纔(わず)かに七八人のみ。是れ亦た感慨を為すに堪えたり。玉誼

『此次奉行聞有貴国王太子前去、未知是否。麗邦』

此の次(たび)の奉行、貴国王太子の前に去(ゆ)ける有りと聞けど、未だ是か

否かを知らず。麗邦 【校註者の沼田次郎氏は、「貴国王太子」が何を指すのか明らかでないとしている。】

「不是。玉誼」

是ならず。玉誼

「今往花旗、惟觀其風土人情耳、非常居、今秋七月回棹。玉誼」

今花旗に往くは、惟だ其の風土人情を觀るのみ、常に居るに非ずして、今秋七月に回棹《帰国》す。玉誼

『此次出行有幾位、官員姓名求示。麗邦』

此の次(たび)の出行幾位有りや、官員の姓名示さんことを求む。麗邦

「奉行与従臣合計七八十人、而官員纔二十人許、其姓名今不能悉書、客日再会、携来以示焉。玉誼」

奉行と従臣と合計して七八十人、而るに官員は纔かに二十人ばかり、其の姓名は今悉くは書く能はざるも、客日《後日》再会せば、携へ来たり以て示さん。玉誼

『繹堂先生刻下在寓所否、弟欲于下午前往拝謁。麗邦』

繹堂者、医師宮崎元民之号也、昨訪麗邦筆語相接、故談及之。

繹堂(えきどう)先生は刻下寓所に在りや否や、弟【麗邦のこと】は下午に前往《赴く》して拝謁せんと欲す。麗邦

繹堂は、医師宮崎元民《宮崎立元の誤り》の号なり、昨、麗邦を訪ひ筆語相接す、故に談じてこれに及ぶ

「可改而待矣。玉誼」

改めて待つべし。玉誼

「入其境問其禁、是貴国与我国之常法也。今入此地、皆侏離躑舌、無可知其禁。先生幸住此土已七八年、則此地政事人情、応詳知駕、請悉一不之。玉誼」

其の境に入り其の禁を問うは、是れ貴国と我国との常法なり。今此の地に入るに、皆侏離躑舌(しゅりげきぜつ：外国人の話す言葉の意味が通じないこと)にして、其の禁を知るべき無し。先生幸いに此の土に住すること己に七八年なれば、則ち此の地の政事人情は、応(まさ)に詳(つまびら)かに知るべし、請ふ悉(ことごと)くこれを示せ。玉誼

『此地風土極好、人情亦淳厚。但本土人多是不務生理、男女日中專事嬉遊。所頼本土規矩甚佳、遊人至止、豪無凌辱侵犯等弊。以故得而安居焉。麗邦』

此の地風土極めて好く、人情亦た淳厚なり。但し本土の人は多く是れ生理《生業》に務めず、男女日中専ら嬉遊を事とす。頼む所は本土の規矩甚だ佳にして、遊人至り止まるも、豪も凌辱侵犯等の弊無し。故を以て得て安居す。麗邦

「堂々天朝之人而住此癖国、是僕所疑也。今以此一言氷解、更無所疑焉。玉誼」
堂々たる天朝の人にして此の癖国に住するは、是れ僕の疑ふ所なり。今此の一言を以て氷解し、更に疑ふ所無し。玉誼

『貴国現下、取士之科如何。其以文章詞賦為取乎、抑倣古法、其郷挙里選、取其廉明正直孝友者乎。麗邦』

貴国現下、士を取るの科如何。其れ文章詞賦を以て取るを為す乎、抑(そもそも)古法に倣ひ、其れ郷挙里選によって、其の廉明正直孝友なる者を取る乎。麗邦

「近来文章詞賦之弊多入軽浮、現下改之、雖皆非郷挙、専以取廉明正直為主。雖然、数百年之弊不可速改、今尚往々而存焉。所挙之人亦依然如故、是予所以大息也。貴国亦有此弊否。玉誼」

近来文章詞賦の弊多く軽浮に入り、現下これを改む、皆郷挙に非ずと雖も、専ら以て廉明正直を取るを主と為す。然りと雖も、数百年の弊は速かに改むべからず、今尚お往々にして存す。挙ぐる所の人亦た依然として故(もと)の如く、是れ予の大息する所以なり。貴国亦た此の弊有りや否や。玉誼

『我国取士之法、首以八股文芸、次以詩賦。然予独惜其専務文詞。而于根本之地未究、正心修身之学不焉。故目今仕途多有吏治不足、豪無救時之方、弟故于幼時篤習詩書、長則慨仕途之無学、遂于棘闈放下、即業岐黄。麗邦』

我国士を取るの法、首(はじめ)八股の文芸を以てし、次に詩賦を以てす。然るに予独り其の専ら文詞を務むるを惜しむ。而して根本の地において未だ究めず、正心修身の学篤からず。故に自今の仕途、多く吏治の足らざる有れど、豪も救時の方無し、弟【麗邦のこと】、故に幼時に篤く詩書を習へど、長じて則ち仕途の無学を慨き、遂に棘闈【きょくい：官吏の試験場。ここでは官吏になることと考えられる】を放下して、即ち岐黄【きおう：漢方医】を業とす。麗邦

「季世所以使然乎、慨嘆々々。玉誼」

季世然らしむる所以乎、慨嘆々々。玉誼

「予觀此地之風俗、似無男女之別、如何。玉誼」

予此の地の風俗を觀るに、男女の別無きに似たり、如何。玉誼

『男女之道大非聖教所為。然所見外国風俗多是如此、即英夷花旗各国亦然。此其所以不足法也。麗邦』

男女の道は大いに聖教の為す所に非ず。然るに見る所の外国の風俗は多く是れ比くの如し、即ち英夷・花旗各国亦た然り。此れ其の法とするに足らざる所以なり。麗邦

「午下当訪繹堂、弟倍坐之願。玉誼午下当に縛堂を訪ふべし、弟倍坐之れ願ふ。玉誼」

午下当に繹堂を訪ふべし、弟【玉虫のこと】倍坐之れ願ふ。玉誼

『如足下得閑与弟同行、属妥当。麗邦』

如(も)し足下閑を得て弟【麗邦のこと】と同行さるれば、妥当に属す。麗邦

「弟有公事、今将有所往。帰後当訪繹堂、必勿遅々。玉誼」

弟【玉虫のこと】公事有り、今将に往く所有らんとす。帰後当に繹堂を訪ふべし、必ず遅々する勿らん。玉誼

『筆談一扣、尚未拝識足下芳名、求示。麗邦』

筆談一扣するも、尚を未だ足下の芳名を拝識せず、示さんことを求む。麗邦

「外国奉行従臣、姓玉虫、名是誼、字子澆、号拙齋。玉誼

外国奉行従臣、姓は玉虫、名は是れ誼、字は子澆、拙齋と号す。玉誼

「便面一握、是弟朋友之所書也、今呈之、以表芹意。玉誼」

便面《扇子》一握、是れ弟【玉虫のこと】の朋友の書する所なり、今これを呈し、以て芹意《微意》を表せん。玉誼

『未修贄礼、先蒙厚恵、愧甚、謝甚。麗邦』

未だ贄礼《しれい：人に会う時、敬意を表して身分に応じて礼物を贈るこ

と。》を修めず、先づ厚恵を蒙る、愧(は)づること甚だし、謝すること甚だし。麗邦

「執薄儀而礼答之厚、赧顔是極。玉誼」

薄儀を執りて礼答の厚き、赧顔【たんがん：赤面】是れ極まれり。玉誼

『多謝々々。麗邦』

多謝、多謝。麗邦

「談将尽而未拝知先生高姓名、請教示。玉誼」

談将(まさ)に尽きんとして未だ先生の高姓名を拝知せず、教示を請う。玉誼

『弟姓潜、名麗邦、別字顕垣、別号養晦。麗邦』

弟【麗邦のこと】、姓は潜、名は麗邦、別字は顕垣、別に養晦と号す。麗邦

「敢問、先生何国人。玉誼」

敢て問う、先生は何国の人なるか。玉誼

『弟乃広東広州府南海県、江南司西城郷人。麗邦』

弟【麗邦のこと】は及(すなわ)ち広東広州府南海県、江南司西城郷の人なり。麗邦

「必期後刻、以談焉、是弟所願也。玉誼」

必ず後刻を期し、以て談ぜん、是れ弟【玉虫のこと】の願う所なり。玉誼

此ノ後、自分【玉虫】は理由があつて、遂に【麗邦に】逢えなかつた。遺憾と言うべきである。

【03】 三月十七日の事

此の日は、明日サンフランシスコを出航するため、殊に嚴重に人数を検査する。始め太鼓・小鼓を打ち鳴らす。人数を揃え、その側に船長・士官兩人が並んで立つ。士官一人が中央に立って、その傍に医師一人が添って、士官が水夫一人づつの名前を呼び上げる。水夫はそれに答えて帽子を脱ぎ、船長の前を通過する。そ

の中で、病気があるものについては医師がその内容を報告する。非常に厳格である。そうではあるが、夷礼の粗雑な事はたとえ船長の前でも、唯帽子を脱ぐのみで、お辞儀はしない。これは考えるに、米国ではこの様な場合だけではなく、平日もまた船長・士官の別無く上下相交わり、水夫と言っても敢えて船長を重要視せず、船長もまた威勢を張らず、同輩の様に振舞う。唯、上下間の交りは非常に親密で、万一事あるときは各人全力を出してお互いに救い合う。苟(いやしく)も凶事があるときは涙を流し頭を垂れて悲嘆する。一方、日本では礼法は非常に厳格で、従臣と言っても容易に御奉行に拝謁することは出来ず、その威厳は鬼神の様である。このため、少し位の下の者は、それより位の下の者に対して大いに威厳を張って、下の者を蔑視する。この規律格式は確かに厳格であるけれども、情交は日々薄く、たとえ凶事があっても外面では悲嘆の顔をしているだけである。上下の間はこの様であるから、万一事が起きれば、誰が全力を尽くすのだろうか。これ国内の安寧が長く続いたための弊害なのだろうか。嘆かわしいことである。礼法を厳格にして、米国の様に上下関係を蔑視することなく、且つ米国の様に交情を厚くして、両国の良いところを取り入れる方法は無いものだろうか。自分【玉虫】は夷俗を敢えて尊崇する訳ではないが、今日体験した事情から判断して、自ら嘆息しているのである。

【04】 三月十九日の事

自分は陪従中、最も低い役をしているので、船上で新見正使及び用役等の飲食の世話をしたり、且つ、器物の汚穢を洗ったりする。今、午後4時頃で食事時間であり、厨房所に飯を受け取りに行こうとしたが、数人が混雑して各人飯を受け取った。しかし、この時の御飯は御奉行等を除き皆冷飯であった。これを受け取った人は皆不平を鳴らし、暖かい飯でなければ受け取れないとあって、一旦受け取ったものを返却してきた。自分は是を見て嘆かわしく思い、このことを書にして船上に張り出した。「此の次(たび)の米国行きは日本開關以来未曾有の事で、米国に行き、威厳を示すことが第一義である。殊に船上は風波穏やかと言っても万里の波濤で危難に逢う事もあり、まさに戦場と同じである。どうして飲食の小事に心を費やす暇があろうか。この飲食は誰より賜ったものであるか、全て上様よりの賜物で一粒とても粗末には出来ない。船上の皆は何と考えているのか。」食事毎に色々の文句を言って炊夫を苦しめて、冷飯では食べることが出来ないとか、酒の肴が少ないとか、器物が汚いので食べられないとか、甚だしいのは残飯は豚・羊に上げ与えて暖かい御飯を求め、或いは菜物の味を美味しくしろと言う者も居る。その人物の資質を考えるに、平生は家で如何なる美味を食する輩か。多

くは一汁一菜に過ぎないだろう。自分の家であれば食事の出費を惜しむが、此の場では俄かに奢侈(しゃし)の言を発して美味を好むは何事であるか。嗚呼(ああ)、万里の波濤を渉り来たれば、たとえ上位の者であろうとも、どの位の蓄えがあると言うのか。万一、危難に逢って日数を積んだならば、何を食料とするのか。この様なことを考えたならば、【米粒】一粒たりとも捨てるに忍びない。いわんや、日本魂の有る者が外国に来て、拘々(くく：こせこせ)として飲食の小事に心を砕く者が居ようか。もしそのようであれば、その心の鄙劣(ひれつ)さが知れよう。陸上でも、皆これに準じてその恥辱を現したならば、開闢以来未曾有の快事も却って不快事となるであろう。優れた人物も生きていけないだろう。此の次(たび)は陪従の徒と言っても、【上位の人は】その人を【陪従として】選択したのではないのか。そうであるのに、前記の様な次第ではどの様な面目があるのか。一行全員は皆心すべきことである。

自分はこの一件について、一人の官吏に相談したのであるが、その人は当時外国奉行定役を勤めていた人で、御奉行并にその他諸官吏の状況を良く把握しており、自分の話を聞いて、大いに嘆息していた。【彼が言うには】このことは陪従に着いてのみの事ではなく、官吏でも終日唯飲食を務めとしていて、その部下では【飲食に心を使うのは】当然のことである。このことは常に嘆息するものであるけれども、これを口外すれば却って問題となるので、唯黙って【上位の人の】意に従っていると事である。嗚呼(ああ)、本当に【一行は】この様な状態であるから、米国の笑いものとなり、どうして威厳を輝かすことが出来ようか。嘆かわしいことである。

【05】 三月廿二日の事

夕方船上を散歩していたとき、自分の友人某が来て、サンフランシスコ滞船の時、中国人と筆談し、中国人が非常に丁重に待遇してくれて、米国の事情を教えてくれたと話していた。その筆談のときに、「今回貴国にて米国と和親を締結したことは実に喜ばしいことである。此度米国は非常に待遇・親切に扱うであろう。しかし、この事を信じて用心しないと、終には米国の術中に嵌まってしまいうだろう。中国でも初めて和親を締結したときは、米国の待遇は非常に良好なものであった。しかし、今は既に雲泥の違いとなってしまう、中国を卑下すること犬馬の様で、婦人・子供と言っても蔑視するに至った。今はほぞをかんでも時既に遅く、慨嘆に堪えない。貴国も用心しないと後刻必ず卑下される。」との事であった。嗚呼(ああ)、此の一言を聞き、肝を冷やし、恐るべし。しかし、中国自らが招いた理由があるかも知らないので、実に日本としても油断すべきでない。そのため、

今回の航海ではその事情を探るのを第一の目的とする。ただ、その任に当たる者は誰なのか。船中の日本人一行は皆、米国の親切さを喜び、いたずらに米国を尊崇して面目を失おうとしている。果たしてこのようであれば、どの様にしてその事情を探ることが出来るのであろうか。

【06】 三月廿八日の事

近日は風波が穏やかで船中頗る閑である。しかし士官・水夫等は少しも遊惰しない。その閑な時に船中の修復及び器械の破損を修理し、その他訓練等の事があって徒に日を送るということはない。このため、大風波があると言っても、直ぐに全防備して欠ける事が無い。且つ船中のみならず、その国も同じ様な制度になっており、日曜日以外、少しも遊惰せず、天文・地理その他万芸に努力・精進し、一つの事を発見すると互いに助け合って、その人の論功行賞とし、他人の行賞を奪うことは無い。常日頃この様であるので、もし急に風難があったとしても各人力を尽くし、その危難に対処して恐怖の気持ちを見せない。これは日常治乱一般に気を付けて用心しているからであろう。いわゆる治に居て乱を忘れずである。日本は二百年來の太平が続き、何事も因循苟且《いんじゅんこうしよ：旧慣に拘泥して改めないこと》して、仕事において更に向上しようとする者が居ない。もし向上しようとする者が居るとしても、唯名利を求めて実用にならない。もし一寸した時間が得られれば昼寝・飲酒して、その懶惰【らんだ：怠惰】は言うに及ば無い。そのため、少し事あれば皆人狼狽してその処理が出来ない。たまたま志有る者は後世の弊害を考えて、種々の方策を進言すると、他の人から愚人或いは狂人と誹謗され、何処にその志を伸ばすことが出来るのか。今、米国人の精勤、且つ相互扶助の精神を見れば、【自分は】心に恥じ入るばかりである。

【07】 閏三月七日の事

ロノーク号は、南アメリカのアスペンワル港から来たもので、船中で自分【玉虫】がたまたま日記を付けようと筆を取った時、米国人が珍しいと思ったのか、士官二人が帽子を脱いで、何か書いてくれと手を合わせて丁寧に頼んできた。このため、帽子の一つは「天下英雄有幾人」【天下英雄幾人か有る】、一つは「一王千古是神州」の一句を書いて遣った。彼等は大いに喜んで、直ぐに持ち帰った。しかしながら、少し経って官吏某から自分が呼び出された。何かかと思っただけそこに行ったら、「一王千古ノ句ヲ書セシヤ」と問いただされた。自分はその事情を詳細に説明したが、その後その事が御奉行の耳に達したと見え、用役から「米

国は共和政治の国なので、一王千古ノ句を書き与えたのは、米国の【政治】理念に反して大患が生じる端緒となるだろう。且つ、帽子は極めて貴重なもので、叨(みだ)りに書するは失礼である。このために万一事が生ずれば、御奉行の面目を潰すことになる。今後決して筆を取るな」と嚴重に注意され、証状【誓約書】一通を取られた。自分が思うに、この事を書したと言っても大患の端緒とはならないだろう。且つ日本の事を書して、鄙下【ひげ：卑しめる事】しては却って上様に恐れ多い事である。たとえ米国が強国と言って、何事も米国の事を尊崇すれば、益々跋扈《ばっこ：のさばりはびこる》して日本を蔑視することになるだろう。当今、既にその幾兆《きちょう：きざし》が現れている。そうであるのに、この様なことでは、終いには日本の醜恥を晒すのみならず、後患の端緒が現れる。何となれば、日本人一行は全員米国を尊崇し、少しもその意に逆らわず、たとえ日本の醜恥【ここでは条約締結により日本が不利になることを意味しているのではないか】になろうとも、安穩として帰国すれば本望であると考え、万事米国に諂諛【てんゆ：おもねりへつらうこと】することは、見るに忍びがたい事である。自分【玉虫】は一書生で事情【条約締結内容についての事情か】に迂闊であるけれども、是のために心ならずも袖を濡らした次第である。【条約締結内容が将来の日本にとって本当に妥当なものなのか自分は検討する立場に無く、且つ真剣に検討する人が一行に居ないので、将来が心配で思わず落涙したということか】

【08】 閏三月九日の事

昨夜水夫二人が病死し、今日水葬の儀式を行った。船長等がこの式に参列し、悲嘆の表情を顕わさない者は一人も居ず、その応対振りは我が子に接する様であった。これに抛って、米国の国力益々隆盛なことを知った。何となれば、上下相親しむ事この様であれば、人々は感化せざるを得なくなる。かつて聞くところによれば、合衆国開闢以来、反逆を行う者が居ないと。実にその様であろう。【一方、】日本の賤官が死亡した場合には犬馬が死亡した場合の様に取り扱い、その葬式の場に【上司として】参列して弔う者が居るだろうか。【日本の場合】上下の情は薄く、それがために、米国と対比した場合、恥ずかしい限りである。今、米国人の行動を見て、【日本人一行の中で】心に恥じない者が誰か居ようか。

【09】 閏三月廿日の事

今日になって、米国ニューヨーク港に近づいたが、米国政府から急に先ずワシントン市に行くべきであると注進があった。ここで暫らく船をサンテホック(ニュ

一ヨークから僅か四・五里の所)と言う所に停泊させ、評議した。その時に、他からの情報として、今回日本使節の饗応として3万ドルを政府から輸送したとの事。これは米国の戦術かどうかは知らないが、3万ドルとはどのような大饗応なのか。日本では、外国使節の饗応は多費と言っても、一回で一万金にもならないだろう。今、この事を聞き、一行全員は驚いた。

ワシントン市滞留中の事

この地に来て日本の官吏から、戸外へ一步も出てはいけないとの厳禁が有った。たとえ止むを得ず外出する場合でも官吏が付き添う。且つ大抵は、時計・羅紗・ビロードの類を買い求めようとして、空しく市内を歩き回って帰宅するばかりであり、政治的制度・情勢を探索しようとする志のある者は居ない。且つ、一人で二・三個或いは四・五個を買い求め、定めて帰国後に【それらを】売買して利益を得ようとしているのだろう。価格の安い品物を選らぼうと奔走している。実に見苦しい事ではないか。自分は学校を尋ねたいと頻りに願ったが、誰一人として付き添うものが居らず、終に願いを達することが出来なかった。いわんや貧院《養老院の類》や幼院《孤児院》を尋ねることは尚更出来ないことである。これは皆情勢・風俗等を探索する場所で、第一に尋ねるべき場所である。今回の米国使節一行の内、御奉行を始めとして誰一人その様な心を持った者は居ない。一方、米国人は一つも隠し立てする所無く日本人に見せようとするけれども、【日本人側に受け入れようとする】心が無いのはどう仕様もない。他に伝え聞く所に抛れば、御奉行等は何もせずに部屋に閉じこもり、他に一步も出ず、非常に謹慎しているとのことである。しかし、米国の民衆は日本人の考えとは違い、【日本人が外部に出ないのは】恐怖しているからではないか、或いは無学無術で外出が却って迷惑になるのではないかと心配しているのではないかと行って一笑しているとの事である。これはその様な理由が無いでもない。日本の官吏共に至るまで、米国側から招待されているにも係らず簡単には行かず、数回の督促で初めて行く。これは大いに尊大さを示す心持であろうが、平生の行動を見れば、何事に抛らず米国の意向に沿わない事はなく、たまたま尊大さを求めているがどうしてその様なことが出来ようか。又、物好きの者は時計・羅紗の類を買い求めるのに100ドル或いは200ドルを支払って一器を買うが、これらは本当に玩具である。上位の者がこの様な物のみに心を使えば、その部下の者が競ってその様な物を買う事をどうして咎めることが出来ようか。嗚呼、今回の航海は全て日本の恥辱を晒すことが多くなるだろう。

前記した様に、米国の男女が日本人を見ようとして、ホテルに来ること幾百人で有るかが分らないほどである。日本の器物・道具を非常に好み、一紙片を得よう

と重器を持って来て、強引に取引しようとする。【日本人一行の中に】狡猾な者が居て利益を得ようとして秘かにホテルを抜け出して徘徊し、米国人と親交して、兼ねてから貯えていた紙片・筆・小物を提供し、その見返りに珍器・奇品を得た者が居た。米国人はもとより気宇壮大で、且つ日本人と初めて接触するので、損益に係らず取引する。しかし、日本人は益々その機に乗じて奸計を巡らして利益を得ようとしている。米国人がこの事を理解すれば、中国人と同じく【日本人を】軽蔑するであろう。且つ、物価も昔に比べれば倍位いに高騰しているので、それを踏まえて取引すべきである。そうでなければ、物々交換で取引すべきで、金銀での取引は止めるべきである。今、急にこの様に変更すれば、米国人は必ず疑念を持ち、支障があると主張するだろう。その時は、万国の物価を比較検討して処理すべきである。その様にすれば米国人も文句は言わないだろう。唯憂慮すべきは、万国と貿易しようとするれば、諸品の製造【能力】を今の10倍ほどに引き揚げないと駄目であろう。限りある人力を以てどれ程頑張ったとしても、達成することは出来ない。貨幣の損益は、論ずる遑(ひま)が無い。【日本の】国は既に衰弱しており、これを改善しようとするならば、蒸気器械を製造して、一人で百人分の仕事をする方策を実施する外に無い。その様にして【合わせて】貨幣の改革をすれば、百年千年【原文は千百年】貿易をしたとしても、衰弱の憂いは無いだろう。位の上に居る君子は、この様なことに気を付けなければならない。今回、フィラデルフィアに来て、米国が日本の貨幣価値を分析した【事を知った】。友人の某《加賀金沢の佐野鼎》が翻訳した内容を以下に記す。これは参考に足る資料である。

【日本の】貨幣として、金・銀・銅・青銅・鉄が有る。その内、主たる貨幣を小判としている。六十年間の改正でその大きさは三様ある。形は楕円形で非常に薄く、且つ柔らかで簡単に曲げられる。それらの成分の多くは銀を混入しているけれども、表面は純金と見える。これは純金をメッキしてこの様にしているとの事である(この銀【金の間違いか】を溶解薬で表面から除去可能である)。

第一は、小判である(文字小判：)。これは六十年が経過したものである。その量は二百零一グレイン半《201.5グレイン⇒13.057グラム》で、その2/3は金、1/3が銀である。又、純度として667/1000は純金としている。その銀を混入した【小判の】価値は、5ドル95セントに相当する。

第二は保字小判《》で、数年前までのものである。その量は174グレイン【11.275グラム】で、その殆ど4/7は金で、3/7は銀である。即ち、568/1000を純金としている。その銀を混入した【小判の】価値は、4ドル40セントに相当する。

第三・第四の小判は、正字小判で、甚だ新近のものである。【米国の】使節が【この小判を】分析しようと【日本に】再来した。この二品は唯小印点を異にするだ

けで、その他は全く似ている(二品有るのではなく、持主の私刻印を米国人は官の刻印と見たのだらう)。その量は、138.75グレインで、純金は凡そ571/1000で、正確に4/7である。これを貨幣製造の基本としていると考えられる。その銀を混入した【小判の】価値は、3ドル50セントに相当する。銀を除去した場合は、3ドル41セントに相当する。

第五・第六は、小さい方貨である(二朱金であろう)。その表面に凡そ1/3の金をメッキし、その量は25.5グレインである。この名目及び価値の順位は何処に属するのかはっきりは分らない。

第七も方貨で、第二の小判の半量である(二分金であろう)。但し1/4よりもやや多く金を含んでいる。その他は皆銀である。この貨幣も前記の貨幣と同じで、理解が出来ない。

第八も方貨で、金一分と呼ばれている(保字一分)《一分判金》。その量は第二小判の1/4である。金の含有も殆ど第二小判と同じである。その価値は、1ドル11セントに相当する。

第九・第十は正字一分の新金で、【米国の】使節が分析しようと【日本に】再来した。その量は第三・第四小判の1/4で、価値は80セント二分二厘に相当する。

第十一は、往時の半一分銀である(半一分は誤りで、古の一朱銀だらう)。この貨幣の一個は、凡そ1840年頃、太平洋に遠く漂流した日本の水夫輩を救育扶助した合衆国の測量船の将官が、その輩から貰った数貨の一個である。その後、合衆国の船が遭難し、その諸貨を失い、只この一個だけが残ったものである。これを米国で日本の貨幣を検討するきっかけとなった。その量は41グレイン【2.66グラム】で、殆ど純銀である。価値は81セントをやや超えるものである。但し、銀貨は全て方貨でやや厚くなっている。

第十二は、銀一分で、ほんの数年前のもので、その量は134グレイン半【8.716グラム】である。純度は981/1000から990/1000までの純銀で、その価値は36セント9分、或いは37セントに相当する。

第十三は、その量が28グレイン半【1.847グラム】あって、殆ど第十二の物と同じである。その価値は8セントに相当する。その名前を知らない。(多分一朱銀であらう)。

第十四は、新銀一分というもので、これも【米国の】使節が【日本に】再来した時のものである。この貨幣も往時の一分と同じ量がある。即ち、134グレイン半【8.716グラム】である。しかしながら、純度は890/1000の純銀である。これは米国製の貨幣の定則900/1000にやや近いものである。その価値は33セント二分八に相当する。

第十五は、紅銅の大きな厚い貨幣で楕円形である《天保銭の事》。その中心に四

角の孔が開いており、百文錢と名付けられている。

第十六は、青銅の丸い貨幣で、中心に四角の孔が開いている。

第十七は、鑄鉄の丸い貨幣で、その周辺は甚だ雑である。これも中心に四角の孔が開いている。

陪從到處、形勢人情之所閱、從其經緯之度山河之險、至器械物產等、耳目所觸、不厭瑣屑、悉記之。及到香港、遭順天府之亂、新聞紙雜出、亦隨得隨筆。雖斷簡不次、足以見其形勢人情。因別為一卷、以付于此云。玉虫誼記

咸豐九年己未八月十九日 第二百九十号

茲有渣顯行火輪船帶來加利吉打新聞紙云。加利吉打官憲、接到五月英師敗於北河口一事、即時出令、備弁軍馬糧草、恭候英國上諭到埠、即下船前來中國、雪大沽之恨。又有數旗西竹國穠族兵勇、自願來中國、勤於王事云云。

上号本紙錄、明法蘭西皇帝與阿士地厘亞皇帝、會於威刺法蘭架地方、講和修好。今摺友人信云。於六月十二日朝八點三點、利法帝乘馬、與數位大員御林軍等、到威刺法蘭架地方、離公館一二里迎接。阿帝見法帝如此厚禮相迎、即令本國御林軍止步、阿帝獨自一人上前見禮、兩國群臣亦互相執手見禮。法帝接阿帝入威刺法蘭架、設筵相待後、二帝入一密房、商議兩國和好。章程妥議之後、二帝

同九月二十日 第三百零六号 京報

奉 上諭。勝保等奏進、剿霍山賊匪、攻克县城一摺。官軍克復六安後、敗匪分竄。經袁念劬等跟踪追殺、斃賊無數、直至霍山縣北。由該縣王自輅見大隊齊到、奮勇進攻、立將守陣之賊全行擊退。乘勢登城、賊向東門出竄。我兵入城、一面追殺、斃賊數百名、生擒百余名、奪獲器械多件、將霍山縣城克復。其舒城來援之賊、先經我軍在白洋舖地方截剿賊千余名、大獲全勝。逆匪分踞霍山、為六安特角。經官軍先後克復、弁理尚為手署。霍山縣知縣候補府經歷 縣丞王自輅、着開復革職、暫留署任、處分已革。副將盧又熊、着免治其罪、仍帶革職、處分留營、效力以觀、後效已革。知府袁懷忠、尚有應行查弁之案、着勝保等查明再行具奏。其余在事出力員弁着並入。克復六安案、內摺尤請獎、候朕施恩、欽此奉旨。此次考差試卷首十七日查看。欽此。

同十一月二十日 第三百三十一号

茲者北河火輪船由上海等處到港帶來上海新聞紙云。有由天津回者稱說。現在北河口大沽砲台多設砲位、周圍各砲台有許多馬隊軍兵。扎營俱是蒙古吉林兵勇、僧王爺親自督理通州天津等處要地隘口、以防英法來年攻擊之事。

同十一月廿四日 第三百三十号

本港鍊行之火輪船名比者、於廿一日丁午、由望買埠到港帶來英國祖家信札並新聞紙云。現在西班牙即大呂宋國與亞非利加洲麼六哥回工國不和、將有動兵之日。英國使臣欲從中勸解。但法蘭西國有助西班牙之意、以為英國欲幫麼六哥之心、故現英法兩國始不相合。法國遂罷議興兵來中華之事、英國亦有許多人責其帶兵官在大沽口弁理不善。故英國不以中國皇帝為敵、不過興兵往北河大沽、責其地方官無禮之罪、以雪五月間之恨而已。其餘各處地方無不照常妥協云云。

咸豐十年庚申四月廿五 第四百一十号

聞說。在澳門被火燒之法蘭西船、船上多載法國兵勇冬天衣服並煤炭六百墩、尽被燒去、並無救出些須。又聞。早數日、大英運兵糧火輪船、在石排灣對開海面擱淺。若得天時連日晴朗、亦可以使其船浮起云云。玆有俄羅斯暗車火輪戰船一隻名士威厘丹奴、由新嘉坡到港。查此船、係在花旗國烏約埠新裝。此船十分好駛、如在大洋面行走甚捷、如除鍊輪車葉火爐等即用帆幄駛風、亦不輪別船之走駛。俄羅斯國之戰船、常係由花旗國英國裝的、其兩國匠人善於船裝故耳。現查北邊各省、目今上半年、米麥大豐熟、故各處米價大跌、近日所到之洋米、是以亦要跌價而沽。

同五月初一日 第四百十二号

摠英文新聞紙云。現英仏兩國、會兵於山東治府地方、俟各處兵馬齊到、然後往北河口交仗。惟看山東地理圖、未有治府之名。茲有友人說。山東沂州府屬莒州、即英仏扼守為會兵之地。因正音諛莒字、與廣東音治字同。現在所到英仏兵勇、陸續駕船上北去了、計程至快亦要本月下旬方有打仗、新聞到港云云。

同五月十日 第四百十六号

茲有船一隻名温打刺、於四月廿二日、由安南細江埠來港云。細江地方安南土人、反叛扼守該埠。法蘭西兵勇、退入砲台堅守、因恐寡不敵衆耳。而後來未知如何也。

同五月十二日 第四百十七号

茲於本月初十日、有渣顛行火輪船一隻名蝦倫士邦、由上海到海路過福州等處帶來上海四月二十七日新聞紙信札俱云。現在上海無生意。又聞。長毛已近上海、離上海城不過數十里而已。長毛所到各處、並無官兵。與他對敵英法兵勇、仍固守上海、城廂內外保護居民。兩江總督何桂清大人、仍在上海隱避。摠初十日本港德臣所印之英文新聞紙有云。現在何桂清在上海、哀求英法欽差大臣甚切、止未有叩首而已。由此可知、何桂清無才之甚。既不能遺芳百世、亦不該將中國之大体、取辱於外國。夫長毛之愚、乃中國內患與英法毫不關涉。況現在英法紛紛進兵往北、攻取天津、雪大沽之恨、並欲扼襲京都。英法豈有德何桂清之辭、派兵攻蘇州、代大清皇帝

恢復之理。乃何桂清念不及此、猶自搖尾乞情、何其不明若是也。本港英文之新聞紙又云。今江南一省既非大清所有、英法大員亦不慮准、洋人收上海之稅、而歸于大清矣。因上海一埠全賴茶生意、今江南產茶之地全屬長毛、何故英法与各外商人在上海者、貿易者要納稅於大清皇帝哉。

同五月十七日 第四百十九号

茲據上海五月初九日有船到港云。現在有數号法蘭西戰船灣泊上海、計程要交秋方有打杖、因法国兵勇未便耳。現在江南長毛所攻各處俱護勝狀、於本月初五六日、連破太倉州嘉定南匯等縣。在上海有人訛傳、長毛要攻上海。故英法大人派兵八百名、離上海城數十里堵禦。其八百人回報大人云、伊等所見皆唐人打唐人、長毛斷不來上海与番人对敵也。長毛好似深曉外國人權勢、時時隱避、不与外國人相殘。有近扶桑地方、被土匪毀拆、亦劫去宝山縣城。雖然各處紛紛打杖、亦有新系到上海。外國人亦有付銀兩入潮州買系、諒必長毛每包系要稅銀若干、即任出口、故其生意亦頗通流云云。每年英七月初四日、所有花旗國人在本貿易、皆歇息不作工、因此日乃花旗國立國之日也。蓋花旗一國原屬大英管轄、八十餘年前、因民有叛心不臣服。大英自扞國主稱伯理璽天德、以四年為一任、任滿另扞別位、立為國主、每年只受俸銀二萬五千大員。副國主者、每年受俸銀五千大員。各部尚書、即受俸銀九千大員、仕不世祿。

每省巡撫、亦由衆民公舉、方得莅民。國內皆寓兵於農、並無餉食。各處守口砲台之兵、不過万余、戰船共三十余隻。年間所費比他國餉甚少。所有國中一切出口貨物、不輸征稅。如有入口貨物、不是花旗土產、乃用本國船隻裝運回國者、如茶葉架菲等物亦免稅。地庖人稀、取食不難。

同六月廿一日 上海新聞 第四百卅三號

茲有顛地行火輪船名洋子、於六月十九日、由上海到港帶來上海六月十四日信札新聞紙云。於五月下旬、有官兵數百、由上海往別處堵禦。此數百兵不帶糧草、所經各村鄉必劫擄民財、未見長毛相敵、即聞風而逃回上海、稟報長毛勢大難當、今已逼近。於是上海居民悚惶紛紜遷走、以致城門踴塞、惟女人不能走出者、則自刎而死。後查長毛、並無追襲。不過官兵稀少、畏懼太甚而已。又聞。長毛見英法兵不肯退守上海、長毛因退入崑山松江等處。常有三兩個長毛、帶太平天國告示、週因懸帖。如有鄉民瞻、敢捉拿交官。則長毛大兵一到、必將該處村鄉誅滅。所以各處遵命、不敢違抗。又刻一部太平天國新書、目為資改新書、班行各處云云。

同六月廿三日 第四百卅四號

茲有鐵行火輪船名加地、於本月廿日、由上海到港帶來上海本月十五日信札新聞紙云。現在長毛仍守蘇州松江各府縣城。上海道僱得呂宋人三百五十名、有一番人名未士乞為帶領並唐人兵、往攻清浦

鼎城大失利、帶領乞亦被打傷等情。在舟山地方有法蘭西根砵一隻、與海洋賊船數船交戰、殺賊約二百、燒船數隻、生擒賊首二名。法蘭西根砵總兵、亦受重傷。又接到滿州大凌灣六月初九日信云。現在該處亦有土人帶伙食壳與英人、使用英師各人爽快。早數日、提督命根砵數号、前往大沽探聽軍情。於初七初八日、英師在大凌灣留下二千名、守營及落船、於本月十五、英法合兵、攻擊大沽。聞說。大凌灣地方、亦有金砂出產。在上海有唐人傳說。有一法蘭伝話官入山東登州城、即番人所叫治府者被唐人謀殺、後提督大人聞報、即將登州城地攻破。但番人未聞此事、故未知真否云云。

欽命文衡副總裁九門御林忠勇羽林軍英王陳

真天命太平天国

欽命文衡正總裁開朝精忠軍師殿右軍干王洪

欽命文衡副總裁九門御林忠貞朝衛軍贊王蒙

九門御林忠愨都衛軍輔王楊

九門御林忠義宿衛軍忠王李

九門御林忠正京衛軍侍王李

九門御林忠敬陸衛軍章王林 為

實情勸諭、棄暗投明、共出迷途、各保永福事。緣夫天下者中國之天下、非胡虜之天下也。寶位者中國之寶位、非胡虜之寶位也。子女玉帛者中國之子女玉帛、非胡虜之子女玉帛也。慨自明季凌夷、撻妖乘釁、竄入中國、盜竊神器、而當時官兵人民、未能共憤義勇、驅逐出境、掃清穢穢、反致低首下心、為其臣僕、迄今二百余年。

濁亂中國、鉗制兵民、刑禁法維、無所不至。而一切英雄豪傑、莫不為其所制而甘為之用。吁、實足令人言之痛心、恨之刺骨者矣。然從前爾等官兵為妖所用。本係被其迫脅、原難深罪。且前時未逢真聖主首出、無所依歸、爾等又不能共創義舉、自不能捨妖他適、譬如黑暗之中未睹見天日、暗中摩揆、不弁方位、何能不誤人迷途以待天曉乎。茲者三七之妖運告終、九五之真人已出。恭惟天父 天兄大開天恩、親命我 真聖主天王降凡御世、用夏變夷、斬邪留正、誓掃胡塵、拓開疆土、此誠千古難逢之際會、正宜建萬世不朽之勳猷。是以一時智謀之士、英傑之儔、無不瞻雲就日、望風景從。誠以深明乎去逆效順之理、以共建乎敬 天勤 王之績也。惟是爾等官兵人等、雖現為妖官妖兵、亦皆是 天父之子女、不過從前誤為妖用、不能不聽其驅使、遂至助妖為害、同天打鬥、跡雖可恨、情實可原。今既遇 真主當陽、自宜棄暗投明、亟歸正道、滌不染之污俗、作 天堂之子女。且我 天王恩高德厚、援救蒼生、凡是果能敬 天識 主、傾心歸附、莫不一視同仁、待以異數。本軍師等誠恐爾等執迷不悟、受妖蠱惑、用是不惜援手拯溺、警擊振鐸、特將順逆之大原、利害之實蹟、為爾等剴切論明之。夫撻妖之籠絡漢人、首以官職、爾等試思、凡有美欠要任皆係滿妖補授、而衝繁疲難者則以漢人當之、使其虧空罣誤、動輒得咎、名雖為官、何殊桎梏。若夫陞遷選調、滿妖則通全保薦、各踞顯要、一屬漢人、

則非妖頭批駁、即是妖部阻隔、縱使功績赫奕、終竟非賄不行。至兵則滿兵雙糧、漢兵單餉。一遇戰陣、則漢兵前驅、滿兵後殿。故每 天兵臨庄、立成蠶粉、其肝腦塗地屍骨堆山者、惟漢兵為最多、而滿兵在後、一見前鋒失利、即鼠竄奔逃、其罹鋒刃冒矢石者、皆以漢人為之障蔽。故世俗呼鄉勇為擋死牌、而呼漢兵為替死鬼也。至於犒賞頒賜、則又皆滿妖是聞、而漢兵無與焉。且爾等之所以拋父母、離鄉井、披霜觸暑、出生入死者、無非欲稍建功名耳、撻妖於軍中功名、則又無所定準、任是紅藍白頂、皆是虛無假借、故俗以軍功頂戴、謂之太平消、蓋以急則予之、緩則奪之也。爾等又何苦以百戰之余身、而博此虛假之名器乎。且也千里徵調、飛符迅急、千山万水、跋涉從戎、露宿風餐、辛勤畢備、身未建乎功名、人已喪於鋒鏑、良可惜也。況爾等為兵為勇之人、多係平日誤作非為、是以借兵勇以為逃死之地。不知本鄉之地、惡爾等如同虺蜴、而撻妖又嚴其法網、多方責治、使一旦還鄉、鄉人即共相誅殛、非活埋諸土、即生棄諸淵。此 本軍師在東時並身歷八省、實所親見、爾等無論不能身致榮顯、即或稍有寸進、亦終不能榮歸故里。故諺有之曰、富貴不還鄉如衣錦夜行。乃爾等從軍則有死而無生、還家則以生而就死、容身無地、死而後已、午夜自思、實堪悲痛。是皆爾等為妖所用、是以一至於此、果何利而何凶、而顧甘心隱忍乎。然此不過就其待爾兵勇者大約言之、至於荼毒生靈、害瘡黎庶、則又

截南山之竹、書罪無窮、決東海之波、流惡無尽者也。撻妖之流毒我中國者如此、凡我中國之人皆撻妖之世仇、所宜共奮義怒、殲此醜夷、恢復旧疆、不留余孽、斯則天理之正、好惡之公。何反貪羞忍恥為之奴隸、違背天朝、不思煽附。是何異曠安宅而弗居、舍正路而不由。嗟嗟、可恨矣、抑可哀矣。爾等抑知我天朝廓達大度、胞与為懷、不分新旧兄弟、皆是視同一體、大功大封、小功小賞、尚而王侯將相、下而兵士婦孺、俱使衣食得所、居处相安。有家者周团圞以相樂、無室者亦婚配以各遂、雖在軍旅之中、仍不廢家庭之樂、以視爾等流離異域、橫死疆場者、真不啻天壤之別也。況乎共扶真主、各建殊勲、今時則榮光永享、後世則竹帛昭垂、千載一時、勲名何既。矧乎太平一統、即在目前、不下三五年間、俱是開國勲臣、那時分茅裂土、衣錦榮歸、閭里輝煌、方不負大丈夫建功立業之志、爾等何竟昧於從違而不早圖變計乎。且我天朝天恩广大、往者不追、爾等果能悔悟來歸、定然量材錄用、切勿以曾為撻妖之官兵、自懷疑畏、裹足不前。務当亟早回頭、速出迷津、各保永福。本軍師實有厚望焉。倘仍至死不悟、甘為妖奴、轉瞬天兵攻克、噬臍無及、爾時悔之亦已晚矣。本軍師等念切中土被妖披靡、故實情明諭、雖痛切不知所言、孰得孰失、請自思之、何去何從、當自諒之。速著先幾之識、勿貽後至之誅、庶無負本軍師諒諒醒諭之至意焉。布告爾衆、咸使聞知。

太平天国 庚申年 月 日

同七月廿三日 第四百四十七号

妓有大英根砵名架刺時合巴、由省城來港中途、遇見有數隻賊船、將一商船劫根砵、即時將賊船數隻並賊匪九千余人拿獲、帶來香港、交官審訊。現在港監犯太多、未知官憲如何着落該九十余名海洋強盜。有人說、官憲將各洋匪解交九龍唐官擬弁、未知此事真否。

查本十七日在油頭馬峙明火打劫一案、係打渣顯庄口、其大班未士仔厘臣受傷數處。賊搶去財物、值銀五千員。摠說、是晚來打劫之賊、不過六十余人。

全上 澳門新聞

聞說。近日澳門賊匪太多、有坐在南灣之行、亦被賊明火打入、又有豬仔館夜間被人打開、救出豬仔客數十名。故此澳門西洋官府、加意防虞、時時整備軍械。又聞。澳門官憲駕戰艦一隻、往日本不准招納。又有人說。日本人欲起兵來攻澳門。因澳門地方乃係上朝准日本人居住貿易之地耳。現近澳坑地方、有些旧牆土人叫做日本城、但未有書史所考、故未知真否。廿二朝、有渣顯火輪船由加利吉打埠載鴉片煙土到港。

同七月廿七日 第四百四十九号

啓者、未士仔刺印字館、有攻破天津口大沽炮台圖一幅、印派各處商民。但摠來信、俱是箇捷、故不能詳細盡錄。摠云、於六月廿六

日、英法大兵出北塘鄉、有一枝英右軍、行了十余里、遇撻子馬兵交仗。撻子馬進前、欲奪了吾士蕩郎大砲一口、但被狄族馬兵打敗、則退入撻子營。英法軍離北塘十五六里、又見有營數坐、英法大軍用大砲攻之。敵人低当不住、則退入新河之營盤。英法又破新河之營盤。是朝十點鐘、英法分左右兩軍攻新河。撻子見英法攻擊甚急、則離新河退入一処地方名東沽阻、大沽北岸砲台約有四五里路。有一枝探路之英馬隊兵、遇撻子馬兵一旗、被英人殺死五十名、奪去馬兒三百匹。於六月二十八日、英法攻破東沽。於是英法大軍在東沽扎營、俟七月初四日、則英法攻城大砲、由北塘大營解到。於初五日早晨、則攻大沽北岸砲台、交仗三點半鐘之久、共計打了一千五百口子、母砲入北岸砲台。至於八點半鐘、攻破如上号本紙所錄等語。

同八月初六日 第四百五十二号

摠渣顧火輪船帶来回北省新聞云。現在天津府城講和之事、英法大員尚未得其所議。恆福亦允於某某日定有欽差大臣到天津會晤。英法欽差大臣等情到期、未見大清欽差至天津商議。英法大員大怒、命尽移各処英法大軍往天津城、候用上日有分派兵勇來守上海者亦調回云云。茲摠花旗船名了厘不、由旧金山到港帶來旧金山新聞紙云。在天打西辺有一銅礦、每日出銅甚多、勝於所聞查旧金山一地、有出金銀銅水銀各宝、又加以土田肥美、不糞而實、不勞而食、

將來必成榮華之大地矣。

同 京報

奉上諭。袁甲三翁同書奏、逆匪圍撲除州、官軍夾擊大勝、並克復全椒、全椒城老摺。逆匪於二月十六已糾衆万余、兩路抄襲除州、圍繞東西北三門。李世忠等登陴固守。候選直隸州李世忠等、自來安帶隊、趕到內外夾擊。副都統銜全福指揮馬隊、從傍截剿。該逆腹背受敵、狂逃奔避我軍、殺二十余里始行收隊。十七日、該逆復糾大股、在城外搶築營壘三座、欲為久用之計。李世忠商同李元忠等、趁賊壘未固、於次日天明、出隊列陣。該逆迎拒李世忠等、首先接伏、所向披靡斃賊、不計其數。該逆退伏營壘、堅匿不出、適朱元興亦由三界石壩帶隊馳到、協力圍攻、於三更時銜枚疾趨、点放噴筒火箭、賊營大亂。我軍擁入刀砍矛刺、該逆奪路狂奔。朱元興等踴躍爭先、踏毀賊壘十三座、斃賊一千余名。十九日、朱元興跟踪追至烏衣、由後抄殺、前營之賊驚惶無措。我軍於鎗砲如雨之中、越牆施放火器、殺斃生擒、無一得脫烏衣、賊營六座一律平燬。復乘勝前進、追至腰甫賊營。該逆繞營而奔、未及天明、又將腰甫賊營七座全數平毀。小店之賊、聞各賊營全破、退入全椒、全椒城。我軍大隊進攻、賊匿不出。二十二日、李世忠揮令馬步兵勇、分路撲剿、密約投誠賊目唐禧青為內應、是日城內火起、該逆自相殘殺。李顯發首先登城、李元忠繼進、拋擲火球火罐、城中內應、將東門

大開。我軍奮力殺入、斃賊無算。二十三日、遂將城池克復、余賊逃入營壘。我軍追殺、又將南門賊營八座一律焚燬。此次李世忠等經袁甲三指授機宜、所向克捷。先後踏燬賊營三十余座、斃賊五六千人。內有偽佞天侯楊映斗、偽煥天侯范得和、偽漚天侯黃銀亮、其余官甚多、奪獲偽印三十二顆、旗幟器械無數、收撫降衆二千余人。密約內應、克復堅城、實屬異常出力。升用總兵李世忠着俟升補總兵、後遇有提督欠失題奏。候選直隸州知州李元忠免選本班以知府記名請旨簡放、並賞給伊德格水濟巴圖魯名号湖南。長安營遊擊朱元興着以參將準先補用、並賞加副將銜藍翎。千總劉士貴着免補千總以守備準先補用、並賞戴花翎。準先千總李紹宸着免補千總以都司準先補用。都司李顯堯着免補都司以遊擊準先補用、並賞加副將。行其投誠內應之唐禧蕃更名唐玉田杜宜魁均着以都司補用、並賞戴花翎。其余出力文武員弁人等、着袁甲三查明保奏、候朕施恩。欽此。

同八月十一日 第四百五十四号

英国有新装極大火輪船一隻名記列衣士敦、於本年五月間、此船離了英国里化布城、駛出于大洋、十余日即到了花旗烏約埠。此船二万二千余墩、大可載客一万余名、過洋海時、如有大浪船上之人亦不覺、見其浪大者好似履平地一般。此船到花旗烏約埠時、兩岸有許多人觀看、有如省仙五月節看竜舟之景相同。起了貨物之後、即

傳人遊觀、每人下船即收銀一大員、後減每人收銀半員。於五月二十二、是日共有六千余人下船驗看。本港人見海有蝦蟇匣蓋船、便連士沙律蓋船意以為大、但不知記列衣士敦火輪船之大、更勝過此等蓋船十余倍者。

同八月十五日 第四百五十六号

茲又摺本港客商有接到上海信札云。大清皇帝見英法欽差大臣決意帶兵進京、故又遣使、在通州与英法欽差商議。上日桂中堂所定各數章程、皇帝無不願從。現聞以上所言恐非實事、故在後又有信接到云。大英欽差離了天津府城直向通州、上京約行有六十里路、並無有清兵阻止、亦未有大清欽差來迎接。但在路上見有文官數員、俱以言辭勸阻。惟大英欽差不從、蓋說英法大軍要往通州扎營、英法欽差決意進至京師、与咸豐君議立和約等語。以上兩說、未審孰是孰否。但由英文訳出、以便衆觀。聞說附近上海各處地方、自長毛去後、有土匪擾亂。各處林庄、搶劫財物、焚燒屋宇、由嘉定至宝山各村鄉、無有不被劫掠云云。

同八月十五日 第四百五十七号

摺英國新聞紙云。於六月間、大英君主在京城地方御駕、親觀民壯二萬人操演隊伍砲械。在北邊約省亦然。現在英國各省俱訓練百姓、教以隊伍並用鎗砲軍械之法、又要費用四千萬銀、堅修英國各港口船澳、及加築砲台、以防外國攻擊之意。或問、英國現在太平燕居

無事、何為広増戰艦、堅築砲台、団練百姓、若此耶。蓋英國之亟修武事者、不過欲使隣國不敢藐視之意耳。因上年法蘭西助以大利亞瑞典那國王、攻擊澳土地厘亞國、大獲勝杖、奪取澳土地厘亞林能地省、歸與瑞典那國管轄、以倍瑞典那國之地。大法皇帝宣告天下云、此次我法兵之助瑞典那國攻澳土地厘亞者、不過為民除暴而已。歐羅巴各國信以為然。不料和約既立、各事停妥、瑞典那國士則割本國兩省名沙會弥士與法國接壤之地、送歸法國、以為勞軍（一作軍）。法國則受之不疑。故歐羅巴諸國猜疑法帝之行為、且畏法國之強悍、也莫不共有戒心焉。現今法國皇帝之故叔父、乃係庶民出身、及登法國大宝。於是連滅歐羅巴十餘國、所戰必勝、所攻必取、後御駕親督二十餘万法兵、往攻俄羅斯國京城馬時古。俄人不敢與之戰、時直隆冬冰雪凝地、南方之人不貫受寒苦。俄國皇帝於法人未到之先、盡將馬時古京城並附近各處村庄用火燒去、使法人無所趨向。法兵到時俄國京城已化為灰燼、無處可安營駐扎。法人深入俄地遂致絕了糧草、又遇隆冬冰雪、冷死飢死者不計其數。於是法人因之以大敗。

同八月二十日 第四百五十八号

茲聞。亞西亞土耳其回子國有一省名思厘亞、在猶太省之北。此省之民、有入回教者稱為度路思、有從天主教者稱為美麼禮。此兩教人同在思厘亞居住、因教門不回、故屢有相關事。近年因土耳其與

英法俄諸國立約、國中所有從天主教耶蘇教皆一律相視。土耳其國王乃係回教人、因上年英法相助合兵敗俄人、於士華士打布地土耳其立明此約。土耳其王雖有信守此約之意、但各處回民多有不從。故此近聞、在思厘亞省地方、度路思回族暴害美慶禮天主教人、肆其殺戮不分男女老幼、並將天主教人村庄屋宇燒了。土耳其王不肯力弁、皆謂此乃鄉民相鬥小事耳。如粵東恩開新鶴數縣人民遭客家之害、前任督憲黃忠漢土表亦以此為小事。但不思此等小事、已殺戮數萬人民、村庄被焚者不計其數矣。茲擬英國新聞紙云。大法皇帝聞報。土耳其國思厘亞省天主教人被回民暴害十分淒慘。土耳其地方官不能力弁理妥等情。法帝震怒、欲派兵前往問思厘亞省回民之罪。

同八月二十二日 第四百五十九號

近日未有北省船到、故戰事未有實報。然大英欽差大臣、自離天津、帶兵直向通州、而進行了六十餘里、並未見有清兵阻止。惟在本港街上有許多唐人說道、僧王在天津詐敗佯輸、特引英法兵深入重地、然後與之交戰。故此唐人預云、英法此次必敗矣。更又聞一等無而為有之輩說、英法已經大敗了。此等之人說出此事、亦似有因、但未將其事而一窮其理耳。余料、僧王斷不肯棄大沽之險而不守、反守通州一帶平壤之地也。且大沽之砲台、僧王業已修築年余、城高池深、堅固莫比。英法兵勇尚能攻取。何況在通州並無險陋之勢乎。

然則英法大軍能在大沽取勝、豈有敗在通州之理乎。此理易明、不待智者而後知也。茲特因無稽之言、而一為弁之。茲接到省城信札云。現在南雄樂昌地方、官兵大獲勝仗、紅匪退入山內、所有北江上落船隻帶運貨物、亦所以通流矣。前數日、已十五箇字號小種茶到省云云。又聞。上海北頭馬路遇火燭、共燒去唐人舖戶一百五十余間。

同八月廿五日 第四百六十號

茲有法蘭西船名威里地碟卑、由上海到帶來上海八月十四日新聞紙云。於十三日、有大英火輪船名奄卑厘得士、由北省到上海回海云。八月初六日、英法大軍來近通州。僧王帶兵二萬五千名、欲與英法人決一死戰。大英欽差見大清兵勇攔阻道路、是以遣巴時大人未士布里被未士洛急頓巴拉把贊並欽差大臣之書、弁數名帶白旗一面、前往僧王投書、不料撻子將各員留住。僧王即時又將英法大軍團圍困住、四面攻擊。是以兩軍相對、大戰一場。僧王失利敗北奔逃、遂留下斃傷者約七百人、大砲八十餘位、軍器各械不計其數、英法人斃傷者不過四十人而已。英法人遂攻通州、於破城之時、任從軍士擄掠且獲得茶葉銀一百万員、又聞僧王於敗北後自刎而死。大英提督大人出示佈告清人云、如有加害於所留投書各員者、英法大軍定必攻下北京、盡將城中屋宇燒燬云云。

同八月二十七日 第四百六十一號

茲接到天津唐人書信云。英法人求天津府尊代請車夫帶糧草入通州。天津府尊稱說、天津並無車出賃、故英法人將天津府尊監押數日、天津府尊不能奈此煩惱、意求英法大員賜酒一樽並刀一口。大英提督遂送這匣酒一樽、但不給與刀。如此天津府尊不得已、差人到各處尋覓車夫、約一箇禮拜之久、然車夫齊集。英法人然後放出天津府尊。該府尊出監時即到大英提督處、謝賜酒不賜刀之恩、稱說英人真識道理。茲接到這急遞匣船帶來舊金山信札云。現在有好多人在舊金山弄麵粉並各樣食物來港發客。茲接到省城云。於八月十六晚、有法蘭西水手三名、在河南金花廟前飲醉行兇、持刀將街上行人名張亞福殺死並傷數人。外國人不忍見此事、亦稟告伊國領事官照會法蘭西領事官、將殺張亞福兇手交問吊、但法人不肯認法蘭西水手上岸殺人之事。是晚無人認得兇手之面、更無人識得兇手之名。故此法人云、利張亞福之兇手、乃係唐人誣捏法人耳。殺人填命法律有條、若法人知其兇手而隱隱不肯交出、正法則法律之條亦何用哉。本港鐵行火輪船名亞頓、於廿四日由上海到港帶來上海八月廿日新聞紙載。天津通州等處、八月初九日以前之事、查僧王在通州前與英法人交仗敗北後、又在通州往北京之路、復與英法人見仗、僧王仍舊敗北。現在英法兵勇離京城二十三、四里之間扎營、在營中可見京中各處高聳之宮室屋宇。英法之師未即時攻擊北京、或因英法攻城之大砲未到耳。於初九日、有唐官帶白旗一面來到英

法營中、送来好多食物、称說、巴時大人並被留各員之人、現在北京公館居住、並無有加害。又聞。咸豐君命其兄為欽差大臣与英法欽差講和、但大英法欽差要 大清官先将被留之人交出、然後講和、如不先将各員交出、英法必攻北京矣。又有人說。巴時大人与各員到通州与唐官会晤、欲挾地方住扎英法兵勇。因有一法蘭西從員、不知因何故事、与一名漢軍相打。故通州官府即將各員留住、或恐軍士加害耳。

同九月初二日 第四百六十二号

此兩日有人在港內傳說、英法大軍業已攻破京都、唯咸豐君並六部大臣俱逃走了。有僧王要与英法人講和、但英法人要大清官先将被留之人巴時大人等交出、然後亦能講和。拋僧王照復云、巴時大人並從員未有到北京、乃在通州已被斬首。英法人聞此復報、即遣人往通州、查問此事、實有確摺。於是英法尽將通州燬拆。此新聞係火船名罵儘也由寧波來港、在寧波聽得唐人如此之傳說。惟拋鉄行火船名亞頓帶來北省八月初九日信札、並無此消息。故此上所說之事、多屬訛傳、遲數日定有上海火船到港便知明白。余料、咸豐君見英法人屢戰屢勝、断不敢殺被留之人也。 拋英國新聞紙云。在亞非厘加西岸有一国名打龜眉、其王名機租、於本年春季薨。其嗣君名罷撻與殺二千人殉葬。 拋花旗国新聞紙云。日本国欽差大臣到花旗国華盛頓京城、兩國既立之和約業經換妥、又駕合衆国火

輪船住巴拿孖過早、至太平海復駕火輪船回國。

同九月初五日 第四百六十四号

前月、在潮州汕頭馬嶼地方、有查顯庄口洋行夜間被賊劫去。後有人查得、此明火強盜俱是由一村而來。大英領事官一聞此事、即派根砵一隻、前往該村追究贓物銀兩。根砵到村時、有武弁並水手數名駕三板一隻、登岸查訪此案、不料該村之人、又將登岸查訪數人留住勒贖。根砵當時見勢孤難敵、是以未便攻他、故特來香港多載（一作截）兵勇、前往然後攻擊潮州。是處之民人乃係有名難治。今歲曾有一臬令亦被該強盜捉去、至今尚未知生死如何。前月又捉去大英武弁並水手數人。此等民人實目無王法、恐來日難免英人之燬滅矣。茲有載糧船一隻名蝦厘罵這時地、於八月二十一日、離天津來港、此船帶來亦如前之新聞。但現街上有人紛紛傳說、唐官將巴時大人加以重刑、又有人說已經斬首矣、又有人說皇上將巴時大人等尽解過滿洲去了。惟未知孰是孰否。又聞。該蝦厘罵這時地船未開行之先、在天津口有颶風、但未有壞船隻云云。

同九月初七日 第四百六十一号

日間有載糧船數隻由大沽來港並無書信帶回、拋有一船名度拿度則說。其船於八月廿六日由大沽口外啓行聞得、英法兵勇在通州多染疴痢之症、故此不得已而退。所有水師兵勇亦上天津護助退出。又聞。被留之巴時大人等已被斬首、惟有一武員名巴刺贊並積族兵六

十名、俱被清兵傷其眼睛、然後釈放回營。又有糧船一隻名爾哥思衣打說。其船於八月廿五日亦由大沽口來港、有唐官由北京帶白旗一面來英法營中云、如若英法放一砲入京城、皇帝則令將被留之人斬首。又擲初五晚有火輪船一隻名拜澳爾亞由天津來港云。現在咸豐君已離了京城逃避、英法兵勇尚未有攻擊京城、但因英法兵勇入天津之時食生菓太多、故染有痢症、不便戰杖、因不得已而欲退。僧王又欲用馬隊兵截英法歸路、又查被留各員已殺了兩名、但未知何員耳。并殺積族兵勇數名。由八月初七以後、未聞有交仗云云。觀以上之事、未知何時方能了局。

同九月初十日 第四百六十六号

於九月初七晚、有顯地行火輪船名洋子、由上海到港帶來上海初四日新聞紙云。有火輪船名亞梳扶帶來北河口八月廿五日信札云、現在僧王大兵扎營、在京都城之北。英法欲往攻之、待一得手、然後用大砲攻北京矣。有附近京城紳士到英法大營云、若英法兵勇到來而不擾亂民間屋宇、伊等則自願備弁伙食各物送上英法大營中應用。又聞。英法大員收到巴時大人書信一封、內言說被留在京各皆平安無恙。又英法因要攻擊、故調各船水師兵勇、登岸往天津、鎮守各處隘口云云。觀以上之新聞。即知前号本紙所錄各糧船回說之新聞、俱是佞訛矣。茲有花旗國火輪船名坭益架刺、於九月初八日到港。該船於五月初八日由烏約埠啓行、經過各埠、皆埋岸在葛刺巴地方。

其船在該處灣泊十二日、有日本國欽差大臣並從員、亦駕此船回國云云。 拋祖家新聞紙云。 大英太子、於本年六月中旬、到了大英屬國亞美利駕地方巡狩、所到各省督憲大臣文武各官並民間紳士、築壇迎接、捕籠結彩、大放花燈、十分慶鬧。

同九月十二日 第四百六十七号

茲拋上海新聞紙云。現在山西太原府官紳勸捐軍需十分嚴迫、若富家子弟有不捐輸、如數者即以重刑從事。其情勢大略、与上年香山嶼沙尾鄉張某被官勒捐之事相同。故太原府屬居民、尽皆心變突起義旗、將胡人尽行殺戮。凡太原城内大小官員、亦多身遭其害者、此皆因清朝不信守和約与英法互動干戈、勢不得不迫籌軍餉所致也。又云。山西起義頭目亦自号為中華皇帝、意欲親率党羽殺入直隸、務然驅逐胡人出境方休云云。余因之有感矣。夫江南已被長毛割據者多年、広東則為英法挾制者數載、江北有捻匪之憂、四川有石撻開之擾、又況目下英法逼近皇都、加以山西太原民變、正所謂災害並至、雖有善者亦無如之何矣。乃國家方凜累卵之危、而庶民猶極耳目之樂、各處開場演戲時事漠不關心。人心向背從可知矣。有心世道者當如何扼腕哉。

同九月十四日 第四百六十八号

茲攬鐵行火輪船名亞頓、由上海帶來新聞紙云。於八月二十九日、英法攻破北京城東門、又將京城內明園內宮室殿宇各樣宝物尽奪去。

於八月二十九日、皇帝見英法攻擊京都、令將巴時大人未士洛並各兵勇放回、惟有兩位被留之員、不能耐此煩惱業經死了。於八月二十八日、皇帝遣前任粵海關恒旗大人前往英法大營說、皇帝願從英法所議、但因被留各員尚未盡放、故攻之。又聞。京內之胡兵心胆盡喪、不敢與英法對仗云云。以上乃係忙速新聞、未能得其詳細。下次火船前港、然後細錄之。可惜二百余年積蓄一旦化為烏有。

同上 上海新聞

茲換上海新聞紙云。於前月、有大股長毛往杭州、意欲攻城、但見杭州城池修築堅固異常、故不攻而退。上日有人傳說、長毛在杭州失利。此說乃訛傳耳。惟杭州一城、雖然堅固、若無救兵與糧、早到終亦不能免長毛所破。現在官兵固無糧勢逼、以致劫民為食云云。又聞。長毛退去松江府城不守、惟官兵亦不敢往扼守、而百姓耕種如常。在松河口、有官兵船二十號奉 憲灣泊在此剿匪。但該處民間亦多為其搶掠所害。在青浦嘉定兩城俱是長毛座鎮間、兵不敢往彼。前月、上海捉獲私走扛勇三名、後經官審訊、擬以笞杖示衆釋放。又聞。長毛攻破太倉州之時、因此城北連大江口難以扼守、故長毛盡將該州內富豪家之財帛搬去。又聞。現在大江南北兩岸俱是長毛得勢、所出政事号令、而鄉民遵依不敢有違。查羅孝金先生於八月初六日到蘇州時、換羅先生有信回印落德臣行新聞紙云。伊到蘇垣見有番人三位先他而到、三位之內、一係醫生、一係惣兵

教長毛以外國軍法隊伍、又一係商人備弁外國軍器等物供給長毛之用云云。

千八百六十年第九月二十七日呱哇新報中ヨリ抄訳

第九月十二日ノ報告ニ、北辺ノ戦ニ英仏勝利多ク、諸城堡已ニ其手ニ落タリト。其後ノ報ニロルトエギン(人名)天津ニアリテ、近頃將サニ北京ニ至ラントス。北京ニアル支那總督官ヨリ和親ヲ議シ英仏ヲ尊敬セントスルノ風説アリ。

第六月十二日英仏ノ全軍ベタン(府名)ヨリ発シ、支那ノ兵陣及ビ処々ノ要害城堡ヲ攻襲シ、北京ヲ并吞セントスルノ望アリ。其諸城ハシンホ府ノ前ニ当リ、ベタン(府名)トタク(地名)ノ間ニ備ヘタル者ナリ。此日曉三時、第二細比支陣第八ボンシヤウブ海兵隊ロベルトナビール(將名)ノ卒ヒタルアルムストロンク(人名)呵訥砲兵隊一同ニベタン府ニ屯聚シ、陣列ヲ整ヒ進行ヲ始メ諸城ニ向フ。其土地極メテ峻悪ニシテ、輜重車之ニ触抵シ頻ニ跡ニ後レタリ。行クコト二三時、此時支那ノ騎兵隊未ダ運動ヲナサベリキ。

八時頃ニ呵訥砲兵隊ヲ屬セル第一細比支陣ハベタン街ヨリ発シ、十時頃仏蘭西將軍モンタウパン(人名)ノ卒ヒタル一軍隊ハヘタン街外ノ橋上ニ出ツ。十二時ニ前ノ細比支陣進ンデ近ク第一城ニ攻寄レバ、韃靼ノ騎兵大勢烈シク進ンデ第二細比支陣ト騎兵貌里瓦埡(陣名)ニ攻入り、暫時ノ間ニ忽チ乱軍トナル。韃人大ニ勇ヲ奮

ヒ、其軍ノ一隊ヲ分テ仏軍ヲ撃ツ。仏將タルメクレユル極テ猛勇、自ラ其一銃手隊ヲ卒ヒテ大ニ之ヲ破ル。韓軍之ガ為ニ全軍ノ三分一ヲ殺サレ敗北ス。メクルゴル(仏將)ハ身ニ創ヲ被ル四所、兵卒ノ死傷モ亦鮮カラズ。韓人敵ヲ防グ甚ダ猛火ナリ。其第六十七隊ト海兵隊ト方軍ヲ為タリ。其第四十隊ハ横隊ヲ為タリ。左右両翼ヲ張り砲台ヲ守護ス、猛ク銃火ヲ発シ、敵殆ンド之ガ為ニ僻易ス。此乱戦暫時過テ英仏ノ砲兵隊横隊ニ備ヒ直シ、第一城ニ向テ烈シク一齊ニ砲火ヲ放ツテ瞬間ニ之ヲ乗取ル。全軍勝ニ乗ジ一齊ニ進ミ入り烈シク第二城ヲ襲撃シ、復直チニ之ヲ攻落シ、此日シンホ府已ニ敵ニ奪ヒ取ラレ、仏軍深ク内地ニ入り、其奪ヒ取タル城堡ニ拠リ陣營トシ兵馬ヲ屯ス。英兵肆イマ、ニ街中ヲ徘徊シ、無人ノ郷ヲ行ク如シ。且ツ其近傍ニアル一広館ヲ取り屯兵ノ処トス。十二日午後ニ仏軍タンク(地名)ニ進ミ入ル。タンクハ城堡ヲ構ヒタル要害ノ一都府ニシテ白河(又北河ト云フ)ノ北岸ニアリ。タク城ヲ距ルコト凡ソ五里、仏軍進テ城堡ニ向テ砲火ヲ放テバ支那兵亦之ヲ防グ、頗ル猛烈ナリ。暫クアリテ仏人此地形悪クシテ輕砲兵隊ヲ用ヒテモ利ナキコトヲ察シ、急ニ軍ヲ収メテ引退ク。十三日タンクニ屯軍場ヲ構ヒ、翌日全軍進攻ノ為トス。其翌曉ノ未明ニ、英仏ノ軍北岸ニ沿フテ進ム。南岸ノ両礮台烈シク砲兵ヲ放ツテ之ヲ防グ。時ニ英仏ノ砲兵隊砲火ヲ猛発シ一時ニ攻寄レ

バ、兩礮台立ドコロニ危ク見ヘニケリ。砲兵隊又悉ク横隊ニ備ヒ、
タンク¹ノ城堡ニ烙丸ヲ打チ掛クレバ、支那軍暫ク防禦シ四時頃
迄ハ砲火猶強カリシガ、敵軍勢一同ニ城堡ヲ襲ヒ掛リ、直チニ街
内ニ乱入ス。此ニ於テ今朝危クナリタル一砲台ハ忽ニ其処ヲ退キ
去テ、近村ノ病院ニ拠テ皆トシ砲火ヲ放テリ。英軍因テ其人ナキ
ヲ伺ヒ、其水夫ノ一隊ヲ分チ竊ニ川ヲ渡ラシメ、其砲台ノ火門ニ
釘ヲ打込マシム。此日英仏已ニタンク¹城ヲ奪ヒ取り、此ニ第二
細比支陣ヲ留メ置キ、奪ヒ取タル兩砲台ヲ護ラシメ、第一細比支
陣ハシンホ府ノ營ニ凱旋ス。

十七日仏人小兵ヲ遣ハシ、北河ノ上ニ当リテ北岸上ノ一村ニ堡砦
ヲ構ヒ、守防ヲ固クス。翌日斥候ヲ遣ハシ、遍ク内地ノ所々ヲ搜
索シ韃靼軍ノ襲撃ヲ察伺セシメ、又諸所ノ城砦ニ大砲ヲ運ビ直チ
ニ敵ヲ逐ヒ払ヒ要害ヲ構フ。

二十日英兵千五百人ノ一軍、並ニ仏軍精銳ノ砲兵隊八トイムタルヤール砲
隊、アルムストロンク砲二隊、各隊皆砲六門ヲ具フ。精選ノ軍兵
ヲ第二細比支陣ニ属シ、第四十四第六十七ノ海兵隊及ビ親軍海兵
隊ハゼネラールマヨール(官名)ロペルトナビール(人名)之ガ指揮
ヲ司ドル。同日英仏ノ軍兵支那ノ城堡ニ向フ。台地軟柔卑湿ノ泥
土ニシテ所々漣ヲ掘リ通セリ。之ヲ進行シテ凡ソ一里許リ城ヲ隔
テ、陣營ヲ取ル。此地已ニ海ヲ去ルコト甚ダ遠シ。此夕寐ネズ、

砲台堡壘等ヲ造築シ、又英仏ノ呵訥小舟ハ河ヲ浜リ、河口瀾サ十二町許ノ処ニ到リ此ニ小營ヲ築キ、不意ノ襲来ニ備フ。翌日未明ニ全ク予備ノ諸造構ヲ終ル。五時ニ城中ヨリ砲発ヲ始ム。英仏ノ砲軍忽チ烙丸ヲ夥シク城上ニ打掛ケ、河ヨリハ小舟ヲ以テ甚ダ近ク城ニ押寄せ頻リニ砲火ヲ放シガ、七時頃英仏ノ砲火幸ニ城中ノ大火薬庫ニ射中テタリ。其勢ヒ雷電ノ如ク、傍ラニアル諸物皆微塵ニナリテ空ニ飛散リ去リ、英軍愈之ニ乗ジ猛発ノ砲火ヲ冒シ、矢丸ノ中ニ攻入り、壘壁ニ攀登レバ、城中ヨリ勇者銃鎗ヲ執テ逐ヒ払フ。此時ノ仏人唯梯子ヲ持チ舟橋ノ用意ナクシテ城砦ヲ繞レル惶ヲ起ルニ甚ダ難渋ヲ致セリ。因テ人ヲ湟ニ入レ、頸迄水中ニ立シメ、梯子ヲ肩ニ負ハシメテ軍ヲ渡スト云。此戦ノ死傷ヲ計ルニ、全軍中死者官員二十二人、英ノ兵卒百八十人、仏ノ兵卒凡百三十人、又支那ノ駄馬軍卒死傷甚ダ多シ。

二十五日又北方ノ城堡ヲ奪ヒ取ラル。此夕ニベチユリーノ大都督、英仏ノ官人ト権ニ和議ヲ結び、南方ノ諸城堡並ニベチユリ郡ヲ割キ与ヒ、軍ヲ止メシム。

シヤンハイ(上海ナリ)ヨリノ風説ニ、方今騒動ノ一揆街中ヨリ引退ケドモ、千五百人ノ警衛此地ヲ固メ、郡中尚穩ナラズ、広東ハ全ク静謐ナリ。

右大略ナリ。

【卷八 終】